



水学園だより

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <https://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学生課

真理は美しい

理事（水産大学校代表） 藤井 徹 生



平素より保護者のみな様をはじめ関係各位には、水産大学校の運営に関しましてご理解並びにご支援を賜り、誠にありがとうございます。

令和6年4月に水産大学校代表に就任し、もうすぐ2年になります。最初の頃は学生さんの見分けも全くつきま

せんでしたが、最近では挙動を見ただけでだいたい何年生かわかるようになりました。やはり1年生は初々しく少しおたおたしたところがあり、4年生になると落ち着いた風格が出てきます。服装・髪型にしても、入学直後はおとなしめだったのが夏休み前後には一気に個性に溢れたものになり、3年生の後半には個性の主張と大人の価値観の融合が見られて就活が近いことが覗かれるようになります。知識や技術を身に付けるだけでなく、自分を表現するという点でも成長していく様子を頼もしく見守っています。

さて、こちらに赴任して以来、様々な場面で挨拶をさせていただく機会が増えました。毎回、その場にふさわしいものになるよう、聞いてくださるみな様のお顔を思い浮かべながら、原稿を考えています。私もこれまで数えきれないくらいの方々のご挨拶を聞いてきましたが、なかでも印象に残った、忘れられない言葉があります。それは、大学の入学式で総長が語った「真理は美しい」という言葉です。さらにその後「しかし、真理にたどり着くのは容易なことではありません。みなさん、日々の研鑽と弛まぬ努力で真理を手にして下さい。」というふうに続きました。この言葉を聞いたとき、全身に電流

が流れるような衝撃を受けたことを今でもはっきりと覚えています。当時の私はうすらぼんやりと研究者になりたいと考えていたのですが、研究者は何を目指して何をするのかまでは思い至っていなかったからです。あれから45年、真理を手にしたかと問われるとお恥ずかしい限りですが、それでも真理に一步でも近づきたいと努力してきたことだけは確かです。私事ではありますが、この言葉にちなんで娘に「真美」と名付けました（妻の猛反対に逢いましたが）。大学の入学式で聞いた言葉が、私の人生の道筋を照らし続けたことは間違いありません。時は流れ、不確実性の時代と申しますか、何が起こるか分からない混沌とした時代になってきました。そのなかで、「真理」という言葉はその重みをさらに増していると思います。その一方で、「永遠の真理なんて存在するのか？」という疑問があっても良いとも思っています。本稿を読んでくださったみな様にも、「真理ってなんだろう」と考えていただくきっかけになれば幸いです。

いまの立場になって改めて思うのは、言葉の持つ力の大きさ、重さです。同じことを言っても、伝え方によって伝わり方が大きく変わります。ましてや言葉の受け手が人間的に成長盛りの学生さんたちであれば、なおさらです。どんな言葉を選び、どう伝えるのか。公式な場での挨拶に限らず、日常の会話の中からも、学生さんの人生を照らすようなメッセージを伝えたいと考えています。この学園だよりが発行されるのは卒業式の直前であると思います。学び舎から旅立つ学生さんへのはなむけになる言葉を心に届けるにはどうしたらよいか、いまから思いを巡らせています。着任の挨拶で書かせていただきました、「学生さんたちが、様々な経験を積みながら、夢に向かって健やかに、そして魅力的な大人に育つよう精一杯務めます」という気持ちは今も変わっておりません。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最近の話題

中山間地域における買い物弱者対策

水産流通経営学科 講師 田村 剛

私は、2025年11月1日（土）に地域農林経済学会（於島根大学）のシンポジウムに参加し、島根県奥出雲町における買い物環境の実態や取組について

聴講しました。奥出雲町は、農業地域類型区分のうち、中間農業地域と山間農業地域とを合わせた中山間地域にあり、現在、地域の商店がなくなり住民の買い物環境が悪化しています。そのため、全住民を対象にアンケート調査を行い、何をどこで買っているか、買い物で困っていることがないかなどや、今後住民が求める買い物環境の情報を収集し分析を行

っています。その上で奥出雲町が県事業予算で購入した移動販売車を無償でNPO法人に貸し出し、移動販売方式で食料品を住民に供給しています。この地域では高齢化が進んでいることから、この移動販売には高齢者の見回りという機能もあり、福祉の観点からも重要視されています。

また中山間地域に立地する道の駅においても、買い物弱者対策への対応が求められており、それと同時に地域活性化の役割を担うことも期待されています。しかしながら買い物弱者対策と水産物直売事業を取り上げる場合、その両立には以下のような課題があると考えられます。買い物弱者対策のターゲットは道の駅周辺の住民であるため人数も少なく、また商品の発注、在庫管理等による仕事量の増加に伴う人件費増という課題があります。それに加え、水産物直売事業では漁獲量が不安定であるため安定的に収益を上げなければならないという課題もあります。果たしてこの2つの課題を解決できるのかということが、私の問題意識です。現在このような問題意識に基づいて、山口県熊毛郡上関町に立地し、水産物を扱うとともに買い物弱者対策を掲げている道の駅上関海峡を取り上げ、水産物直売事業と買い物弱者対策との両立の可能性や方策について検討しています。

道の駅上関海峡においても、食料品などの生活必需品の供給範囲を広げるために移動販売を検討中であることから、奥出雲町の事例のように全住民の意向を聞き対策をとることによって買い物環境に対する満足度を上げようという取組は、買い物弱者対策を考察する際に大変参考になると考えています。

買い物弱者対策は、中山間地域を中心にこれからますます重要性が高まっています。山口県には道の駅が24か所ありますが、買い物弱者対策はまだまだ進んでいない状況であることから、現在の研究を踏まえて様々な提案をしていけたらと考えています。



着任のご挨拶

海洋生産管理学科 助教 西 翔太郎

令和7年4月1日付で、海洋生産管理学科資源管理学講座の助教に着任いたしました西翔太郎（にししょうたろう）と申します。

私は本学海洋生産管理学科を卒業後、水産学研究



科に進学いたしました。水産学研究科修了後は、「いであ株式会社」という建設環境コンサルタント会社にて9年間勤務しておりました。

前職では主に「水中可視化技術」を用いた水中構造物や地形、海洋環境、生物の調査そして観測機器・手法の技術開発に従事しておりました。「水中可視化技術」とは、観測機器を用いて水中の地形や構造物、生物分布・流れなどをモデル化し、事象を把握しやすくする技術のことです。

水産学研究科時は漁具学研究室にて、集魚灯の開発に取り組んでおり、その中で集魚灯に集まるカタクチイワシの蝟集機構が、カタクチイワシの比視感度で評価されるある光の量に対して強く依存することを明らかにし、カタクチイワシを集めるために必要な光量の定量的な評価に関する研究を行ってまいりました。その研究活動は日本水産学会漁業懇話会奨励賞という学生賞を受賞しております。また、前職では水中構造物やその周辺に生息する生物の調査を行っており、昨年1月に放送された公営の自然ドキュメンタリー番組では、広大な海域からトラバガニを探索する調査の様子が紹介されました。ご覧いただいた方もいらっしゃるかもしれません。さらに、「小型曳航式海底観測機器」や「水中施設点検用ドローン」などの設計・製作を行っており、一部の機器は国土交通省の技術カタログに記載されています。現在は、海洋調査の実務経験を活かし得られた漁具に対する生物の行動記録そして漁具周辺の流れ・水温などのデータをもとに数値シミュレーションを行い、漁具形状や運用の最適化・省力化に関する研究テーマに取り組んでいます。

民間企業での勤務経験が長く、教育者としてはまだ駆け出しではありますが、日々諸先生方から多く学びながら、講義・実習・学生指導に励んでおります。人手不足が叫ばれる昨今、即戦力となる人材の育成が求められており、水産大学の「実践的な学びを重視する教育」は、今後ますます重要性を増すと感じております。そうした中で、民間企業での経験を活かしながら、水産業界で活躍できる多様性のある人材の育成に貢献できるよう、誠心誠意努めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

第30回ロボティクスシンポジアでの依頼講演

海洋機械工学科 助教 藤原 慎平

令和7年3月18～19日に開催された第30回ロボティクスシンポジアにて京都大学より講演の依頼を受け、参加してきました。会場は道後温泉ということで、しっかりと温泉も堪能してきました。

本シンポジウムは日本ロボット学会、日本機械学会ロボティクスメカトロニクス部門、計測自動制御学会システムインテグレーション部門が共同主催している会場で、ロボット関連の研究に携わる研究者同士が分野の垣根を越えた情報交換・議論をするために開催されています。

2日目のワークショップのテーマが「食料—環境問題の解決を目指す農畜水産業におけるロボットセンシング技術」であり、藤原はここで自身が開発している水産用ロボットの紹介をしました。養殖生簀や定置網を海中に長期間保持する際に発生する付着物を除去するための水中ロボットや、漁網の一部が破れた際に応急処置をする水中ロボットなどを開発しており、それらの実証実験や今後の展望について発表しました。特に漁網の付着物を除去する水中ロボットに関しては、西日本ニチモウ株式会社と水口電装株式会社を交えた共同研究を締結しており、開発が上手くいけば商品化もあり得るとのことで、会場の反応もなかなか良かったように感じました。

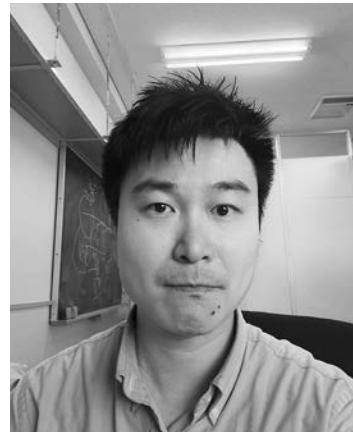
藤原以外の発表では、同じく水産大学校から派遣されてきた海洋機械工学科の椎木講師が、蛍光で活魚の魚病感染を確認する技術や、ヘルムホルツ共鳴と呼ばれる縦波の共鳴現象を用いた活魚のサイズ測定技術について発表を行いました。また農業の分野では、他大学や企業で研究されている農作物収穫ロボット、牧草生産拡大のためのセンシング技術、土壌の状態を確認するためのセンシング技術、養鶏における孵化予測のセンシング技術、ウシのカウンセリング自動化を実現するためのセンシング・AI活用などの発表があり、どれも大変興味深い内容でした。これらの発表を通じて、分野は異なるものの、農畜水産業の現場において省力化やデータに基づく判断の自動化が重要であると改めて実感できました。

今回のシンポジウムへの参加は、自身の研究を客観的に見直すとともに、今後の技術発展の可能性を広げる貴重な経験となりました。得られた知見を今後の研究や教育活動に反映させ、水産業の発展に貢献できるロボット技術の創出を目指していきたいと思えます。



着任のご挨拶

食品科学科 助教 鄭 屹 峰



今年4月1日、水産大学校食品科学科食品機能学講座に着任いたしました鄭屹峰(テイ キツホウ)と申します。これまで、中国および日本の大学・研究機関において、食品の機能性に関する研究と教育に取り組んでまいりました。

私は中国福建省にある福州大学にて、修士課程を修了いたしました。その後、同大学の生物工程研究所に見習い研究員として、食品に含まれる生理活性成分の探索や分析に携わりました。その後、より高度な専門性を身につけるため、2016年に京都大学大学院博士課程に進学し、クロレラなどの天然素材を対象とした機能性成分の研究を行いました。特に、質量分析計(LC-MS/MS)を駆使し、微量ながらも生理機能に大きな影響を与える成分の同定と、動物モデルを用いたその作用メカニズムの解明に力を注いでまいりました。

2021年からは信州大学バイオメディカル研究所に助教として勤務し、日本の伝統的な発酵食品である納豆が持つ認知機能改善効果に着目し、その有効成分と脳内での作用機序について研究を進めてまいりました。

日本は海に囲まれ、豊富な水産食品資源に恵まれた国です。そのため、水産食品の摂取がもたらす生理機能や機能性成分の同定、さらにその作用メカニズムの解明は、これらの水産資源を効率的かつ持続可能に活用する上で極めて重要です。また、これらの研究成果は、高齢化社会における生活習慣病予防や認知機能改善のための新たな栄養戦略としても期待されます。

近年、中国では「海洋強国」の建設が推進されており、水産・海洋分野への注目がますます高まっています。私は中国出身という強みを活かし、日本と中国をはじめとするアジア諸国、さらには可能な限り世界各国との学術交流を深める活動にも尽力していきます。

今後は、水産大学校における教育・研究活動を通じて、水産食品の新たな可能性を科学的に明らかにするとともに、国内外の研究機関との連携を深め、次世代の国際的に活躍できる研究者の育成にも貢献してまいりたいと考えております。どうぞご指導ご鞭撻のほど、よろしくごお願い申し上げます。

水産施設調査（講座外実習）

生物生産学科 助教 松井 英明

水産施設調査は生物生産学科3年生を対象とした講座外実習です。本実習では、水産物の生産基盤となる増養殖施設、研究施設、加工施設、流通施設などをおよそ1週間かけて見学調査します。あわせて、各見学先で現場の概要、問題点、およびその解決努力などの説明を受け質疑応答・議論をすることで、特に増養殖に関する水産業の現状について理解を深めることを目標としています。例年、3年生のクラスを担当している同学科教員が本実習を担当しており、今年度は松井がその指導にあたりました。実習初日は学内で説明会を開き、2日目～6日目にかけて松井の選定した施設へ見学に行ったあと、7日目の最終日に議論とまとめをおこないました。

今年度は増養殖施設として、下関市栽培漁業センター、安藤建設株式会社の野波瀬養殖場、および山口県栽培漁業公社の外海栽培漁業センターをそれぞれ見学しました。各施設では、アカウニとアワビ類の種苗生産および中間育成、トラフグ養殖、キジハタの種苗生産をおこなっている様子を見学しました。生物生産学科では、増養殖技術に興味を示す学生が多く、数多くの質疑応答が繰り広げられていました。本実習を通して、異なる次元の行政、および民間のそれぞれで抱える課題の差異を再確認しました。研究施設の一環で、しものせき市水族館「海響館」のバックヤードツアーに参加しました。海響館では、各所施設をまわりながら、飼育魚類、エサの管理、餌料生物の培養（ワムシ、アルテミア幼生）、海藻水槽、検査（レントゲン）についての説明を受けました。海響館の通常のツアーではみられない深



下関市栽培漁業センターでの見学の様子



海響館での見学の様子

部まで見学させていただき、本実習のなかでも最も学生が活き活きとしていたように感じました。また、加工施設として林兼産業株式会社の長府飼料工場、および流通施設として下関漁港市場地方卸売市場をそれぞれ見学しました。学科の講義「水族栄養学」を担当する私としては、養魚用飼料の主な原料は天然資源に依存していることを身近に感じてほしい思いで、飼料と漁獲物のそれぞれの出発現場を見学先に選定しました。水産学は裾野の広い分野であるため、学生が各業種の現場の枠内に留まらずに水産全体の構造を俯瞰できるようになれば幸いです。

今回の実習は多くの学生にとって、水産関連の仕事先に出向くはじめての機会であったと思います。就職活動の本格化する来年を迎えるまえに、現場での空気感にふれたり、社会人としての振る舞いや自身の就職先について見直したりすることができたのではないかと期待しています。今後も引き続きクラスの学生指導に精進してまいります。

着任のご挨拶

天鷹丸二等航海士 長田 猛

今年度より天鷹丸二等航海士に着任いたしました、長田猛（ながた たけし）と申します。簡単ですが自己紹介をさせていただきます。私は令和4年4月に水産研究・教育機構に就職し、3年間調査船陽光丸の航海士として働いた後、本船に配属となりました。

私は岡山出身で、周りに海の無い環境で育ちました。そのため海へのあこがれが強く、高校卒業後は大好きな海について学ぶために長崎大学水産学部に進学し、その後東京海洋大学水産専攻科にて三級海技士免許を取得しました。その時、練習船で全国の様々な港を回り、調査に参加する中で仕事として船に乗り海に関わっていかうと思いました。

昨年までいた陽光丸では、三等航海士として海洋調査やトロール操業等に関わり、慣れないことが多く、忙しいながらも充実した生活となりました。仕事だけでなく休日には旅行に行ったり、趣味の卓球に打ち込んだりとメリハリのある生活ができることは、船員の醍醐味に感じてます。

現在乗っている練習船天鷹丸は、CTDといった調査機器の整備の他、船内のネットワーク関係を担当しています。本船では、自身の出身大学とは異なりますが、私と同じように航海士を目指す学生が沢山乗船します。そのため自分の学生時代と重なる部分があり、懐かしく感じるとともに学生の皆様と一緒に乗船できること大変嬉しく思っています。また、水産大学校は、とても真面目で勉強熱心な学生が多いことに驚かされます。実習や作業の前には積極的に質問をしたりメモを取りながら話を聞いたりする様子にいつも感心しています。そのため今までの自分の勉強不足を痛感し、学生と同じく勉強の日々です。早く学生から信頼される航海士になり、船乗りの楽しさを伝えていければと思っています。

着任から早1年弱が経過しましたが、船長を始め乗組員の皆様には、水産大学校についてあまり知らない自分にもとても丁寧にご指導くださり、非常

ありがたく思っています。これからも頑張っていきますので乗組員、大学関係者の皆様どうぞよろしくお願い致します。



就職活動

就職活動を振り返って

水産流通経営学科4年 清水佳乃

大学3年生の夏、第1志望であるJF全漁連に自らアポを取り、職場見学や会社説明をお願いし対応していただいたことが就職活動への第一歩でした。自らアポを取り実際に訪問したことで、面接の際に志望度が高いことをアピールできたと思います。

一方で、大学生活ではアルバイトに力を入れたため、自己アピールで語れる経験の幅が狭く、内容を工夫する点に苦労しました。しかし就職活動を通して、自分の得意・不得意を俯瞰的に捉えられるようになり、自己理解が深まったと感じています。

これまでの人生の中で幼稚園受験から高校受験、大学受験まで経験してきましたがその中でも就職活動は人生を左右する最も大きな試験だと思っており、その大きなプレッシャーに耐え抜く経験ができたことは非常に重要でした。

また2団体に応募して両方から内定をいただき、第2志望の団体に辞退の連絡を入れる際には、後輩や大学のイメージを損なわないよう、丁寧に連絡することを意識しました。加えて、辞退先は卒業研究調査でお世話になる予定であったため、今後に影響が出ないよう配慮をお願いした行動は就職活動を通じて学んだ貴重な経験です。皆さんの参考に少しでもなったら幸いです。

悩み込まない

海洋生産管理学科4年 佐野大樹

就職活動を進める中で、私は「悩み込まない」ことを意識するようになりました。就活は情報も多く、周りと比較して焦ったり、自分に自信が持てなくなったりする時期でもあります。しかし、考え

ぎて立ち止まってしまうと、行動できないまま時間だけが過ぎてしまうことに気づきました。

そこで私は、悩む前にまず動くことを大切にしました。企業研究やエントリーシート作成など、完璧を求めすぎず、とにかく一歩踏み出すことで気持ちが軽くなるのを感じました。行動してみると、新しい発見があったり、自分の強みに気付いたり、思っていたより前向きな変化が生まれました。また、友人や先輩、キャリア支援の先生に相談することで、自分一人では見えなかった視点をすることもできました。一人で抱え込まず、人に頼ることも就職活動では大切だと実感しています。

就活は不安も多いですが、悩み込みすぎずに行動することで、自分らしく前に進めると学びました。今後も「まずやってみる」という姿勢を大切にしながら社会に踏み出していきたいと思っています。

就職活動を終えて

海洋機械工学科4年 吉富千紘

私は就職活動を経て、国家公務員として働くことを決めました。国家公務員試験は民間企業と比べて採用時期が遅く、周囲が次々と内定を得ていく中で、不安や焦りを感じる期間が長く続きました。しかし、最後まで自分が納得できる進路を選びたいという思いを持って取り組み、無事に目標としていた職に就くことができました。もし思うような結果が得られなかった場合でも、一留してでも翌年に再挑戦するという選択肢には十分に価値があると感じています。

就職活動では、資格取得やSPI対策など早めの準備も重要ですが、私が最も大切だと感じたのは、面接での応答力やコミュニケーション能力です。相手の質問の意図を正確に理解し、自分の考えを落ち着いて伝える力が、最終的な評価につながると実感

しました。

私は入学当初、機関士として働くことを目標としていましたが、学びを深める中で自分には適していないと感じ、この道を選ばない決断をしました。この選択に後悔はなく、自身の向き不向きを受け入れ、自分に合った進路を選ぶことが大切だと感じています。

これから就職活動に臨む皆さんには、焦らずに自分自身と向き合い、納得のいく進路を選んでほしいと思います。

就職活動を振り返って

食品科学科4年 清水麻那

私が就職活動を始めたのは昨年3月からです。早期選考の内定者がちらほら出ており、重い腰を上げながら企業研究を始めました。まず就活の全体像について把握し、学校やネットの就活体験記を読み漁りました。中でも失敗談や苦労した話は特に勉強になりました。当時はどんな仕事に就きたいかというのが漠然としていたため、企業の選択肢が非常に多かったです。ただそれゆえ苦手意識のあったグループ面接を避けて選考を進めるという手法を取ることができました。苦手を克服することも大切ですが、こうした方法も一つの参考になればと思います。

また、就活は自己分析が重要だと感じました。過去の経験から自身の行動力の源や価値観を整理すると自ずと就活の軸が見え、面接で話す内容を用意しやすいです。加えて予想外の質問にも対処しやすいと感じました。限られた時間で自身を最大限PRするためにも、まず己を知る事から始めてみてはいかがでしょうか。

最後に、就活の結果は人それぞれだと思います。納得のいく結果が出た方も、思うようにいかなかった方もここで培った力は必ず今後に生きます。皆様がいつか人生を振り返った時、幸せを感じられる道を歩んでいけることを願っています。

「資格は武器。経験は財産。」

生物生産学科4年 立助広平

私が就職活動を終えて強く感じたのは、「学生時代に積み重ねてきたものは必ず自分を助けてくれる」ということです。

私はこれまで、船舶免許一級、潜水士、ダイバー免許、危険物取扱者、ふぐ調理師免許など、興味を

持った資格には積極的に挑戦してきました。資格をもつことで実際に現場作業を任せてもらえる機会もあり、学生のうちから貴重な実務経験を積むことができました。こうした経験は大きな自信となり、社会に出る助けになりました。当初、資格がどれほど役に立つのか半信半疑でしたが、就職活動では多くの企業の面接官から高く評価していただき、自分の強みとして大きな後押しになりました。

また準備してきたことが多かった分、就職活動への不安も小さかったと感じています。だからこそ後輩の皆さんには、ぜひ学生のうちに色々なことへ挑戦してほしいと思います。資格取得はもちろん、アルバイトや実習、課外活動など学校の外で得られる経験も将来の大きな財産になります。時間のある大学生活は本当に貴重です。ひとつでも多くの「やってよかった」という経験を積み、自分の可能性を広げてください。それがきっと、就職活動と社会に出るからの自信につながります。

就職活動【すぐに始める】

専攻科船用機関課程 兼田雄介

日本郵船株式会社より内定をいただいた兼田雄介です。就活中意識していたことは、「すぐに始める」ことです。

学生時代、バックパックでのインド旅行や言語学習など自分の興味が出た分野を思い立ったら、行動を起こすようにしていました。就活中は、気になった企業に連絡を取り、会社訪問やインターンに参加し友人や先輩から情報を得ることで、他の学生よりも多く情報を集めることを重点的に行いました。結果的に、他学生と差別化をすることが出来たと感じています。長期的にだらだらと行動するよりも、とにかく行動をしていくスタイルがとても効果的でした。

また情報収集をしっかりと行ったため、自信を持ち面接に臨んでいました。後輩の皆さんには、「すぐに始める」ことを強く意識して、場数を増やしてください。私は、周りの学生よりも覚悟だけは1番だと自らに言い聞かせて、面接に臨んでいました。

具体的にとっても役立ったことは、市販の本を読むよりも先輩方の就職活動まとめを読み込んでいました。専攻科の人に聞いてみると持っていると思います。これから就活を行う皆さんが満足 of いく就活ができるよう願っています。私も来年から見習士官いわゆるアプランティスとして日々精進していきます。

図書館

図書館だより～学生の様子など

生物生産学科 半田岳志

水産大学校図書館に収蔵する図書資料はどれくら

いあるかご存じですか？令和7年の段階で約12万件もの図書資料を収蔵しています。図書館なので文学作品を配置するのはもちろんですが、水産大学校では自然科学や社会科学に関する専門書や研究論文を多数収蔵しています。現在でもそれら最新の文献

を1年に数百件程度を入れ、「知の集積」に務めています。図書館に入ると最初に新着本コーナーを目にします。図書館職員や各学科の教員が選んだ本、特に、水産や食に関する法政経済、船舶運用に必須の工学や運航学、自然環境や水生生物の生態に関する新着本を揃えています。水産大学校に入学した学生達は、これらの本に接することから始まります。授業が進むにつれ、学生達は図書館1階に配置された各分野の専門書を読み始めます。専門用語が多いので学生達は苦労しますが、専門用語辞典も図書館に収蔵しているので、それらの意味を調べられます。令和7年度の約半年間で図書館にて貸し出された図書資料は2000件に達しています。3年後期からは、図書館2階に配置された図書資料を利用する学生が少しずつ増えてきます。2階には自然科学などの研究論文を配置しています。論文を作成する際に引用可能なものばかりで、4年生以上の学生が取り組む研究(卒業論文・修士論文)の専門分野に関する内容を含んでいます。さらに図書館には配置された図書資料だけでなく、インターネット上で公

開された論文が利用できるよう専門学会や大手出版社と法人契約しているので、書籍や文献の取り寄せが可能です。図書館職員は毎日多くの学生さんに接することができるので、各学生の様子を感じることができます。これからも多くの学生達が図書館を利用しやすいように、図書の整備や閲覧環境を整えたいと考えています。



学生部だより

社会人一年目 現状報告

マルハニチロ株式会社 下関工場 乾燥食品課
上田 雄大

私は2025年の3月に食品科学科を卒業し、マルハニチロ株式会社に入社いたしました。マルハニチロは水産商社と食品メーカーを掛け合わせた企業で、2026年3月にマルハニチロからUmiosに社名を変更するため現在は変革の時代を迎えています。私が配属された下関工場では、ちくわと味噌汁のフリーズドライ製品の2種類を主に製造しており、学生時代の実習と入社前の二度にわたり下関工場の見学の機会をいただきました。そのおかげもあり、仕事に対する

抵抗や不安はなく入社できたことはとても助かっています。

現在は、フリーズドライ製品の乾燥作業やそれに付随する機械のメンテナンス作業に携わっています。フリーズドライ製品はトレー

に充填した製品を1日かけて凍結し、真空下の昇華反応によって製品を1日かけて乾燥させます。乾燥を終えると、食卓でよく見るフリーズドライの製品になります。下関工場ではプライベートブランドの製品の製造が多く、他社商品の製造を行っている日が多いです。そのため、日々異なった製品を製造しており、マルハニチロの商品展開の規模の大きさに驚いています。スーパーやコンビニで下関工場の製品、ひいてはマルハニチロブランドの商品を消費者の立場で見つけるとやはり大きな喜びを感じます。また、日々の業務に併せて資格や免許の取得のチャンスもいただいております。自身のスキルアップにも繋がっている点は会社の方々に感謝しています。

製造現場では限られた人、モノ、金、時間を使って生産していかなければならないため、その点はシビアになっていると日々感じています。また、現場の人間にしか分からないところや経験則による感覚も大切であると先輩社員を見て感じています。社会人1年目として、毎日勉強の精神で業務に励んでいます。

これからも引き続き水大卒業生として下関の地で食の一端を支えてまいります。最後になりますが、ご一読いただきましてありがとうございます。名前だけでも覚えていただければ幸いです。

在校生の皆さんへのエール

マルハニチロ株式会社 増養殖事業部 鮮魚販売課
田次雄登

在校生の皆さん、こんにちは。マルハニチロ(株)の田次雄登(2017年に海洋生産管理学科を卒業)で





す。在学中は端艇部に所属し、主将として仲間たちと全力で部活動に打ち込みました。

練習は厳しく、時には部員たちと意見がぶつかり、喧嘩をすることもあった中で、心が折れそうになることも何度もありました。しかし、辛い練習を乗り越え、仲間たちと一緒に戦った試合後の達成感、今でも忘れられません。社会人になって久しぶりに当時の仲間たちと再会すると、積もる話が尽きず、あっという間に時間が過ぎてしまいます。あの頃に築いた絆は、今も私の大切な財産です。

卒業後はマルハニチロ㈱に入社し、増養殖事業部に配属されました。2019年からはマルハニチログループの養殖場にてブリ、ヨコワ、サーモン、カンパチ、マグロ、マダイ稚魚の生産に従事し、新たなプロジェクトとして新魚種の「スギ」の生産にも着手しました。魚の生命力の強さや、自然環境の変化に対応する難しさを肌で感じながら、現地スタッフと共に養殖場の運営に携わりました。

そして、今年度からは増養殖事業部鮮魚販売課に配属され、カンパチとスギの販売担当として働いています。マルハニチロ㈱では、若手社員にも裁量を持った業務を任せてもらえる環境があります。プレッシャーを感じることも多いですが、その分大きなやりがいを実感できる毎日です。生産現場を経験してきたからこそ、育てた魚の価値を伝え、お客様に届ける仕事に誇りを持っています。

学生時代は、比較的自由に好きなことに時間を使える貴重な期間です。研究、部活動、アルバイト、趣味——どんなことでも構いません。興味があることには積極的に取り組んでみてください。私自身、部活動に全力で向き合った経験が、チームワークやリーダーシップを学ぶ場となり、今の仕事にも生きています。

失敗を恐れず、一生懸命楽しみながら、たくさんの経験を積んでください。その一つひとつが、必ず皆さんの人生の糧となります。

「吉見」の地で学んだ知識と経験を胸に、皆さんがそれぞれのフィールドで大きく羽ばたくことを心から応援しています。

就職活動をするにあたって

株式会社松岡 第5物流センター 業務部
和田 光生

私は現在、株式会社松岡に勤めており、物流倉庫事業の事務職に配属されて約半年となります。主な業務内容は、企業様からご依頼を受けた貨物（国内貨物、外国貨物問わず）の管理です。具体的に、「出庫」という貨物を倉庫から出す作業を行う際に必要となる伝票の作成と、「入庫」される貨物に管理番号を付与することなどが、私の業務内容です。当然のことながらまだ初歩的な内容ではございますが、自分自身の中では立派な業務内容の1つとして捉え、責任をもって業務にあたっております。

就職活動をするにあたって私が大切だと感じたことは、「経験を積む」ということです。学生の皆様の人生において、大学3年生の後半から4年生前半までの約1年間は最も面接を経験する最初で最後の期間であると思われます。その期間の最中や準備期間でたくさん経験を積んでください。経験と言っても人それぞれ様々ではございますが、一番重要なことは面接の数をこなすことだと思います。一般的に面接なんて高校受験の1回、あっても数回程度でしょう。最初はうまくできなくて当然です。しかしたくさん面接をこなしていくことにより慣れていき、自分の思い通りの発言ができていきます。また面接以外の普段の日常生活でも、アルバイトやサークル活動の中でのコミュニケーションに加え、少し距離の近い友人とのコミュニケーションなどに着目することも良いかもしれません。その中でいま自分が発言したことは適切であったか、相手に悪く受けとられ方をしていないかなどを考えたら気が滅入ってしまいそうになりますが、そういったストイックな言葉選びが就職活動にも今後の人生にも役立ってくると思います。

大学または社会は小中高生とは違い「主体性」が求められる場です。自ら様々なことに挑戦をしていき、経験を積むことによって、豊かな人生が送れるのではないのでしょうか。私もそういう生き方をしていきたいです。

